

御文法話

大家名説集第壹

宮部圓成師説



阿彌陀如來ノオホセラレケレヤウハ、末代ノ凡夫罪業
ノワレラタランモノ、ツミハイカホドフカクトモ、ワ
レヲ一心ニタノマン衆生ヲバ、カナラズスクフベシト
オホセラレタリ。

第一席 たのむは欲願ではない

一 この讃題の御言葉は、四帖目第九通疫癘の御文のなかに御示し下された御教

「我れ
たのむ
は欲願
ではない
か」

第一の
不審

化である、時にこの御示しに就いて重々の不審が立つことで、先づ第一の不審といふは、初に「阿彌陀如來のおほせられけるやうは」とあれば、蓮如上人の御作りごとではない、皆阿彌陀如來の御掟でなければならぬ。處が阿彌陀如來が何處に我をたのめと仰せられてあるぞ、十八願の三信の文の中に助けたまへとたのむといふ様な相は見えぬ、大無量壽經上下二卷はみな第十八願の意を説かせられたことなれども、たのめと仰せられた御言葉は一ヶ處もない、勿論其の中に含んではおらうが、たのめと仰せられた御言葉がない、然れば今蓮如上人が「我をたのまん衆生をば必ず救ふべし」と仰せられたとのたまふは、偽りであるか偽りでないなら何れの經文に説いてあるぞ、其文を出して見せて下され、恐らくはあるまい、無いとして見れば御文の御化導が作りごとになりますまいか、此義如何と云ふ不審が立つ。

二 此不審を解くについて古から三通りの心得違ひが出来た。其三通りの心得

願がた
さめさ
のふこ
云だこ
さふこ
誤解云ふ

違ひとは一に功存の願生歸命辨の説。これはたのむと云ふことは第十八願の中に
ある。即ち欲生我國の欲の字で成就の文では願生彼國の願の字である。たのむと
云ふは願と欲との意味であると書いてある。此説は阿彌陀如來をたのむといふは
其本は三信の中の欲生、成就の文の願生心である。第十八願の三信を約むれば欲
生心に約まると見込んだものである、何故に左様に見込むかと云へば、淨土論に
は至心も信樂も出さずに欲生の一を出して願生安樂國と仰せられ、又善導大師は
能生清淨願往生心と欲生ばかりが出してある、故に三信を約めると欲生心の一に
約まる、其欲生の二字の意を日本語で「たのむ」と仰せられたものぢやと云ふこ
ゝろである、此説は近來世俗で使ふ言葉では、たのむと願ふを同じ様に使うて
居る、夫を以て御文を捌いたが誤りの本となつたのだ。行卷に「歸命とは本願招
喚の勅命なり」とある此御釋と、信卷に「欲生我國といふは、如來、諸有の群生
海を招喚したまふの勅命なり」とある御釋とを望め合せて兩方共に招喚の勅命と

たのむは欲願ではない

四

あるから歸命きみやう即ち欲生よくしやう、欲生即ち歸命きみやうなりと見込みこんで願生がんしやう歸命きみやう辨べんと題だいしたものと見える、是これは大おほいなる誤あやまりである。

三 世俗せぞくではたのむと願ねがふとを一緒しよにして同じ意味いみにするけれども、漢字かんじに當あてる時は「願ねがふ」と「たのむ」とは大おほいに差別さべつのあるとである。世俗せぞくでこそ人ひとにもものをたのむことを御願おねがひ申まをすと云いふ言葉ことばを使つかへども、能よく々吟味ぎんみして見みますと願ねがふと云いふことは自分の心しん中で志求しきうすること、心こころの上うへにかやうに致いたしたいものであると望のぞむことである、夫故それゆゑに漢文かんぶんの書籍しよせきには内典ないてん外典ぐゑてんに通つうじて、人ひとに物ものをたのむときや、人ひとをたのみにすることを願ねがふといふ字じで顯あはすことではない、本願ほんねんと云いふ願ねがひの字じでも述文じゆつもん讚さんに「心こころに希求けきうするが願ねがふなり」と譯やくしてある。希求けきうとは法藏菩薩ほふざうぼさつが心こころの内うちに、何卒なにぞや我成佛われじやうぶつせばかやうありたいものであると、御おのぞみなされるのが願ねがである、夫故それゆゑに漢文かんぶんの御聖教おしやうけうに願ねがひの字じをたのむといふ處ところへ御使おつかひなされたことは只ただの一ヶ處しよもない。願生がんしやう欲生よくしやうをたのむといふことになされたことは一ヶ處しよもな

願生を
欲生の
たのむ
さは云
はぬ

欲願の
所期の
果のた
のむ一
の所歸
の體に
向ふに

い、但し御文に南無といふ二字を御釋なされて淨土に生れんと願ひて彌陀をたのみ奉るこゝろなりとある、一寸見ると南無の二字の中にある願ひ故にたのむことと取違へまいものでもなければ、これは淨土へ生れたいといふ志があるゆゑに、そこで彌陀をたのむといふとでこそあれ、たのむを願ふと仰せられたことではない、去れば只の一ヶ處としてたのむを願ふと仰せられたことではないことである。全體たのむといふは相手のある言葉で、向ふにたのむべき相手がありてたよりにし、力にし、よりかゝりすがりまかせて請ひもとむる心の含む事である。

四 然れば「たのむ」と欲願とは一混してはならぬことである。最初より字義の上で別の意味になつてゐる、況んや字義の違ふのみならず、欲願といふときは所期の果につき、「たのむ」といふときは所歸の體に向ふ、土臺から違ふではないか夫を一混してたのむといふは願と欲との意味であると申したは大いなる誤りである、この踏出が違ふところから終に三業募り、意業募りの大違ひとなつて了ふ。

たのむは欲願ではない

六

かやうなむつかしい御断おほしは説教せつけうの上うへでは入用にふようなきことの様やうなれども、同行衆どうぎょうしゆでは随分迷ずむひ易やすいことで、平生へいぜいにたのむと願ねがふとは同じおなじことに使つかうて居ゐる言葉ことばゆるゑ、たのむといふは後生ごしやうを助たすけて下くだされと阿彌陀如來あみだにょらいに願ねがふことであると手短てみじかに申まをせば、なる程ほどさうかと思おもひ込み易やすいゆるゑ、願生歸命ねんじやうききみやうの異安心いあんじんは一時ひととき大おほいに盛さかんになつたことである、夫故それゆゑに篤こくと聞き分わけて置おくが宜よろしい。

仰に順
體が大

五 全體當流ぜんたいたうりうの彌陀みだをたのむ一念ねんは、今世俗いませぞくで人間同士にんげんどうしが人ひとにござうぞかうして下くだされと願ねがふやうな事こととは大おほに違ちがふことである、祖師聖人そししやうにんの御釋おんじやうに「歸命きみやうはすなはち釋迦彌陀しゃかみだ二尊にそんの勅命ちやくめいにしたがひ召めしにかなふと申まをすことばなり」と仰あふせられて、仰あふせに順したがふが大體だいたいである。其仰そのあふせに順したがふ意こころが彌陀みだをたのむ一念ねんである。然しかるに願生歸命者ねんじやうききみやうしやの申まをす様やうにござうぞ助たすけて下くだされとたのむと申まをすときは、夫それは勅命ちやくめいに順したがふではなくて阿彌陀如來あみだにょらいを順したがはせることになる、御正意ごしやういの御安心ごあんじんは持もちかへだのみをし順したがはせるのではない、我等凡夫われらほんぶが彼尊あなたの仰あふせに順したがふのである、この

殷の紂
王の喩

處の味ひが知れるとむつかしい理屈は覺えずとも、願生歸命には迷はぬほどに理屈離れて自督にかけて能々心を注めて味うて見られよ、「罪はいかほごふかくともわれを一心にたのまん衆生をば必ずすくふべし」その御親切なる仰せが聞得られた一念は、どうしても助かる縁のない私をたのむ計の御助けと信ずるより外はない、其一念が即ち歸悅歸税の順ひだのみである、歸悅とはよろこび、敬ひ重んじて歸服することである。

殷の紂王のやうな不仁な王が暴政を行ふ時は、下萬民が是はつまらぬ、何時いかなる身になるかも知れぬと泣き悲んで居るところへ周の文王武王といふ様な仁者が出て萬民塗炭の苦みを救ふときは、皆擧つて喜び、順ふを歸服するといふ。今我々は悪王の暴政位なことではない、死ぬはいやでも死なねばならず、落ちるはいやでも落ちねばならぬ、行く先思へば眞黒闇、仕様仕方はない此私、詮方盡きた後生の一大事を、阿彌陀如來の御方より、我をたのめ必ず助けるぞと

喚んで下さる勅命が聞えて見たら、よりかゝらいで何としやう、よりたのまいで何としやう、顔しかめく不承々に順ふではない、喜びく順ひ奉る其相が後生助け給へのたのむ一念である、然れば願生歸命者の様なぞくと持ちかくるたのみではない。

旅館
我家

六 又歸税なりといふは舍息と申して舍は我家のこと息は休むことで、長き道中に疲れた者が我家に戻り、やれ樂やと心の底より安心して休む味ひである、旅館や休憩所で休んだのでは、種々な心配があれど、我家と申すものは何の心配もなし氣樂なものである、久遠劫來の長の旅、何時も心配ばかりであつたものが、我をたのめ必ず助くるどの御勅命に順ふ思ひは、我家で休んだ如くかうかあゝかの案じは少しもない、至心信樂己を忘れて佛願に乗ずる心が歸税である。久遠劫來休みなし一息に流轉して來た私を、罪はいかほごふかくとも彌陀にまかせよの仰せに出逢ふた一念は、何の様ななく仰に順ひ、たのみ奉るばかり、決して願

生歸命者の様なごうぞくと持掛けるたのみではない、是であらう、本願の欲生
心成就の文の願生心を、たのめの勅命とするは誤りであるといふことは解つたで
あらう、此外にまだ信樂の樂の字をたのめの勅命であると申す誤りと、信の字を
たのむと讀む例があるゆゑに、本願の上でいふ時は信樂がたのめの勅命であると
申す誤りがあれども、夫を一席に辯じては甚だ長くなるゆゑ次席に於てゆる／＼
と辯じませう。

第二席 たのむは樂の字ではない

一 前席に於て一段の不審を立て、御取次に及びかけた、其不審と申すは、今蓮
如上人は阿彌陀如來のおほせられけるやうはわれを一心にたのまん衆生をばかな
らすすくふべしとおほせられたりとの御意なれども、肝心の第十八願に我をたの
めといふ御言葉はないやうである、果して無いとして見れば蓮如上人の仰が立た

願生歸
命にた
まされ
るな

ぬことになる、若し有るといふならば何れにありやと申す不審である、此不審を答ふるに就いて古來三種の心得違ひが出来た、第一が欲生我國の欲の字は成就の文では願の字になりてある、たのむとは欲と願との意味であると云ふ、此説が本となりて三業歸命の異安心が出来て大騒動となつたことは前席に辯じて置いた通りである。

たのむの樂の字と見ざる誤解の第二の不審

二 さて第二の説ではたのむといふ言葉を第十八願で求むる時は信樂の樂の字に當る、此樂の字は音洛と讀むときはたのしむこと、音「ゲフ」魚教（去聲）と讀むときは信卷に欲也願也愛也と御字訓を出ださせられた如く信じ願ふといふとで信樂と云ふ、欲生願生の願ひは淨土を願ふこと、信樂の願ひは阿彌陀如來へ願ふこと、欲生願生の願ひとは違ふ、そこで信樂と熟してある、信とは阿彌陀如來の仰を信すること、その阿彌陀如來の仰を信する中に彌陀をたのむ意が具してある故に夫を知らせて樂の字をそへて信樂と誓はせられたものである、樂の字のねがひ

は淨土を願ふことではない、御助けを願ふことである、淨土を願ふことは三信の中では欲生心である、信樂の樂の字のねがひは阿彌陀如來に向うて願ふことゆゑ、樂の字がたのむといふ言葉の出處であるといふ義である、この第二説は前席に辯じた欲生願生をたのむに當てた説よりは一段上である、一段上とは信樂の樂の字もねがふ欲生願生もねがふ共にねがふことなれども、欲生願生のねがひは所期の果につく信樂のねがひは所歸の體に向ふと斯様に分けたは結構である、この違ひ目がなくては三信の中で同じねがひが二度出ては煩重になる、是は信卷の樂の字の下に願也とあれども、願生の願とは差別があるといふことを屹度心得置くべきことである、同じねがふなれどもねがひ鹽梅が違ふ、信樂のねがひはねがひのぞむ意である、依つて御經には歡喜愛樂と説かせられた、歡喜愛樂といふは名號の謂れを聞いて信ずる時やれく嬉しやと喜びくねがひのぞむ意である、欲生のねがひは極樂淨土に參らんとねがふ意である、本願の謂れに疑はれた信の一

欲生の信が樂ひの
れが樂ひの
れが樂ひの
れが樂ひの

たのむは樂の字ではない

一三

念ねんに喜よろこび、御おたす助けの阿あ彌み陀だ如に來よらひに向むかふたねが心こころと、淨じやう土どへ往わう生じやうせんと願ねがふ心こころと意ごころばえが違ちがふ、但たゞし三しん信しんを一しん信しん樂けうに合あはする時ときは信しん樂けうの中なかへ攝おさまるのである、只ただ今は欲よく生しやうと信しん樂けうとを並ならべて差さ別べつ門もんで申まをすのだから、屹きつ度とこの差さ別べつが立たたねばならぬ、依よつて差さ別べつをつけた丈だけは第だい一せつ説せつよりは一段だん勝すれると申まをすのである、去さりながら當たう流りうのたのむは樂けうの字じである故ゆゑに願ねん也なり愛あい也なりと仰あふせられた、願ねん欲よくの二じ字じをたのむに當あてると云いふは誤あやまりである、此この義ぎは物もの數かずを云いふには及およばぬ、一ひと口くちに評へうする時ときは道だう理りも文もん證しやうもなきことである、樂けうの字じにもせよ、願ねんの字じにもせよねがふとは心こころにのぞむことである、たのむとはたよりにし、力ちからにし、よりかゝり、すがりまかすることである、夫それを強しいて樂けうの字じをたのむといふ義ぎの本もとであるとか又または語ごの本もとであるとかしたがるのは、やはり世せ俗ぞくのたのむとねがふとを一しよ緒じゆに使つかふことには古こ代だいにはないことで、近きん來らいの俗ぞく語ごであるから皆みな様さまは此この執しよ着ちやくを離はなれて心こころ

珍らし
い事を
聞き及
ばぬ

得違ひをせぬやうに聴聞するがよい。

全體御當流の御安心を聴聞するには珍らしい事を聞くのが所詮ではない、聖人一
流の御勸化を眞直に聞くが所詮である、故に學者達が如何ほど面白い理屈を云
ひ並べられても、當流正依の經論釋に據のない事は用ひることは出來ぬ、そこ
で信樂の樂の字がたのむ義であるとか樂の字をたのむと讀むとか申す處は、三經
を始め七祖の論釋にも祖師以來の聖教にもないことである。故に是は用ひられ
ぬ、然れば第十八願にたのむと云ふことはないか。若し是がなくては蓮如上人の
御化導が拵へ事になるやうであるが是は如何と申すに、是は今時の末學が何でも
蓮如上人の御化導を立てぬくやうにせねばならぬと新義を考へ出して掛るには及
ばぬ、蓮如上人の思召は蓮如上人の御言から頂くが一番慥なことである、四帖目
初通の御文に「ソモ〜當流にたつるところの他力の三信といふは第十八の願に
至心信樂欲生我國といへりこれすなはち三信といへどもたゞ彌陀をたのむところ

一たの
めたの
御化導
は速如

様の拵
へ事で
はない

の行者歸命の一心なり」と仰せられた、當流とは蓮如上人の思召は祖師御相傳の眞宗一流の御勸化を御傳へあらせらるゝ思召である、その祖師聖人の御勸化の趣きは、第十八願の三信の中の信樂の一がたのむでもなく、欲生の一がたのむでもなく、「三信とはいへどもたゞ彌陀をたのむところの行者歸命の一心なり」との御指圖である、この御指圖から頂いて見れば強いて第十八願の文にたのむといふ言葉は標し出すには及ばぬ、行者歸命の一心とは即ち論主歸命の一心である、愚鈍の衆生をして解了し易からしめんために天親論主が力を盡して歸命の一心として御知らせ下された、其論主をのけて強いて本願の文にたのむといふ文字を見出さうと掛るは論主を越えて心配するといふものである、夫は末學の分限を知らざる心得である、左様な了簡から種々な新義を造り出すゆゑ徒に苦勞するばかりで正意には契はぬ、祖師聖人は三國七祖を押のけて御勸めはなさらぬ、蓮如上人は祖師を押のけて御勸めはなさらぬと心を据ゑて向へば、蓮如上人の御文の御化導

三信は
一名號

は教行信證六軸の表紙の幾度も破るゝまで御覽あらせられて、祖師聖人御相傳一流の肝要はたゞこの信心ひとつにかざれりとの御勸めである、即ち六軸の中で第三の信卷が肝要である、その信卷の中では兩番の問答が最肝要である、此兩番の問答は第十八願の三信は論主歸命の一心なりと、三信一心の開合を御知らせ下さるゝより外はない、第十八願の三信は法の方で申すときは、欲生は信樂を體とす、信樂は至心を體とす至心は至徳の尊號を以て體とす。法の方では三信の體は南無阿彌陀佛ゆる、蓮如上人は南無阿彌陀佛といふ本願を立てましくてと仰せられた。其第十八願南無阿彌陀佛の名號を、たのむものを必ず救ふの御勅命といたゞかねばならぬ。御和讃に阿彌陀如來より信心を與へたまふ與へ方を、「眞實報土の正因を、二尊のみことになまはりて」とある、「みことに」とは御言葉にてといふこと、其御言葉とは「至心信樂欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして、眞實報土の因とする」とあれば、至心信樂欲生我國とある

が阿彌陀如來の御勅命である、依つて尊號銘文には「至心信樂はすなはち十方の衆生をしてわが眞實なる誓願を信樂すべしとすゝめたまへる御誓の至心信樂なり欲生我國といふは他力の至心信樂を以て、安樂淨土にうまれむとおもへとなり」と仰せられた。此阿彌陀如來の第十八願の御勅命を、行者の方へ聞受けて見れば、南無阿彌陀佛の相を心得わけたより外はない、依つて御文に「信心獲得すといふは第十八の願を心得るなり、此願を心得るといふは南無阿彌陀佛のすがたを心得るなり」と仰せられた、十方の諸佛方が第十七願の誓約によりて、阿彌陀如來の威神功德の不可思議なるを讚歎したまふ、其讚歎なざるゝ所では種々に説きたまへども、約めて見れば南無阿彌陀佛の名號を信せしめたまふより外はない、一切の聖教といふもたゞ南無阿彌陀佛の六字を信せしめんがためなりといふこゝろなり、是が成就の文の釋迦如來の御指圖である、其名號を聞く聞き様は、善知識より南無とたのめば阿彌陀佛と助けたまふ、たのむものを必ず救ふべしと

の仰せなりと聞かせていたゞくが、信心の貫ひ場である、いよ／＼行者の腹底へ
 徹到したところが、疑ひなく一心に彌陀をたのむ論主歸命の一心である、然れば
 第十八願の三信は別々に三度かゝりていたゞくのではない、罪はいかほどふかく
 とも我を一心にたのまん衆生をば、必ず救ふべしとの仰せを信じたてまつる一念
 が、たゞ彌陀をたのむところの行者の一心である、其彌陀をたのむ歸命の一心に
 は三信缺目なく揃うてある、茲を御文一帖目十三通に「大經には三信と説き觀經に
 は三心といひ阿彌陀經には一心とあらはせり、三經ともに其名かはりたりといへ
 どもそのこゝろはたゞ他力の一心を顯はせるこゝろなり」と仰せられた此筋合よ
 り頂けば祖師聖人の御一流では、阿彌陀如來の第十八願を與佛敎相應の天親論主
 の御指圖通り、我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしとの仰せとなるのであ
 る。然れば實に弘通したまふ御文の御教化は恐くは彌陀の直説と云はねばなら
 ぬ、そんならたのめの御意を嫌うてはすまぬ、然るに天親論主を擱き祖師聖人の

(第三の
不審)

あらう、經文きやうもんにないことを仰あやせられては御文おふみの御化導ごけだうが立たぬではないかといふ不審ふしんを立て、此この不審ふしんを解とくに就ついて三通りさんほうの心得こころえちが違ちがひのある中なか、第一だいいにたのむといふは願ねんと欲よくとの意味いみである、即すなはち欲生ほつしやうがたのむと云いふことだといふ誤あやり、第二だいいには信樂しんげうの樂げうの字じに當あたるといふ誤あやり、以上いじやうの二説せつは辯べんじ終はつたから、今席こんせきは第三だいいに信樂しんげうの信しんの字じをたのむといふ説せつをお話はな致いたしませう、此この説せつは唯信ゆゐしん鈔文せうもん意いに信しんの字じを釋じやして「本願ほんがん他力たうりきをたのみて自力じりきをすつるをいふなり」とある、又明信またみやくしん佛智ぶつちのこゝとを和讃わさんに、「佛智ぶつちの不思議ふしぎをたのむべし」と仰あやせられ、御文おふみに「一念ねんに彌陀みだをたのみたてまつる行者ぎやうじやには無上むじやう大だい利りの功徳くどくをあたへたまふこゝろを和讃わさんに聖人しやうにんのいはく、五濁ごじやく惡世あくせの有情うじやうの選擇せんたく本願ほんがん信しんすれば」とある、又外典またぐえでんにも信しんの字じをたのむと讀よむ例れいがある、これらの例れいに依よつたものであるこの義ぎは隨分ずいぶん人の惑まごふ義ぎである、よく／＼心こころを靜しづめて聽聞ちやうもんせられたい。

これらの御釋おんしやくは固もとより信しんずるとたのむとは其體そのたい一いつなるものゆゑ從容じやうじやうに仰あやせられ

たのむは信の字ではない

二〇

たのである、去りながら言葉の義筋は判然と別であることを心得ねばならぬ、信ずるとは疑ひなく眞受けにすること、法を機に受ける方である、たのむとはよりかゝり、すがりまかせること、機より法に向ふ方である、體は一にて信ずるたのむ一念同時なれども、言葉のかゝり工合は別だから機を信ずるとは申せども機をたのむとはいはれぬ、それゆゑ祖師聖人は信卷に信の字に十二の字訓を擧げて信の字の意を釋したまへども憑也とも頼也とも仰られない、外典には何程有るとも相承の釋にはないことゆゑ断じて用ひられぬ。

信の字
をたのむ
ふ説云

二 然らばいよく第十八願にはたのむといふことはないやうである、此義いかゞぞと申すに、これは蓮如上人の思召は、四帖目初通の御文に「そもく當流にたつるところの他力の三信といふは第十八の願に至心信樂欲生我國といへり、これすなはち三信とはいへどもたゞ彌陀をたのむところの行者歸命の一心なり」と仰せられた、此御教化より味うて見ると三信の中の欲生の一つがたのむでもな